

シンポジウム

「オーラル・アート・ヒストリーの可能性」をふりかえる 池上裕子

日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴは、美術の分野に携わってきた人々に聴き取り調査を行い、口述史料として収集・保存するプロジェクトである。二〇〇六年十二月に研究者や学芸員が中心となって発足し、二〇〇九年六月よりウェブサイトで書き起こしの公開を始めた（www.oralhistory.org）。立ち上げメンバーの一人である私は、プロジェクトのお披露目も兼ねて昨年十一月に国立国際美術館で開催したシンポジウム、「オーラル・アート・ヒストリーの可能性」のオーガナイザーを務めた。この催しはすでに書き起こしが公開されており、また『あいだ』（二七〇号、二〇一〇年三月二〇日発行）の特集にも意欲的な論考が寄せられている。したがって本稿では、シンポジウムを契機に私が考えたことをざつとばらんに書いてみたい。

まず、現代美術人口が決して多いとは言えない関西で、このシンポジウムに八五名もの出席者（登壇者を含む）があるとは予想していなかった。開場早々、政治学の方野でオーラル・ヒストリーを精力的に行っている御厨貴氏の姿を発見したことも嬉しい驚きだった。もちろん、高名な学者の出席や、聴衆の数だけでシンポジウムの成否を判断するのは単純に過ぎるとはいえ、自分の予測よりこのプロジェクトは人々の関心を呼んでいるという手応えを感じた。

また、現代美術人口が決して多いとは言えない関西で、このシンポジウムに八五名もの出席者（登壇者を含む）があるとは予想していなかった。開場早々、政治学の方野でオーラル・ヒストリーを精力的に行っている御厨貴氏の姿を発見したことも嬉しい驚きだった。もちろん、高名な学者の出席や、聴衆の数だけでシンポジウムの成否を判断するのは単純に過ぎるとはいえ、自分の予測よりこのプロジェクトは人々の関心を呼んでいるという手応えを感じた。

のも事実だ。実際の討議は多岐にわたり、非常に充実していた反面、時間不足で十分に議論できない点も多かった。ここでは、コメントターの北原恵氏が指摘した、なぜ「日本美術」という枠組みでアーカイヴ活動を行うのか、という点について私見を述べたい。

これは私たちがアメリカ美術アーカイヴによる先例をモデルとして出発したことから、その基本的な枠組みを踏襲したことによる。日本の美術界に関わってきた人であれば、言語や国籍を問わず聞き取りを行う方針ではあるものの、近代的国家史観が疑われ、人文学の分野でもトランスナショナルな方法論が標榜される昨今、この選択は「ナショナル」を自明のものとして強化しかねないとの批判は当然あり得るだろう。だが、近代以降に生み出された美術の多くがナショナルな枠組みの中で作られ、また語られてきたことは、歴史的事実としてはなくならない。戦後の美術も同様である。それを無視して、各メンバーの興味に基づいて場当たり的に聞き取りを行えば、アーカイヴは全体のまとまりを欠いたものとなり、利用者の信頼も得られないだろう。『あいだ』で稲賀繁美氏も指摘しているように、アーカイヴとはそもそも、その目的に沿って活動範囲を限定化して、その効果的な資料の蓄積を行うことができるからだ。

また、国際的な美術シーンという観点からは、これは戦略的な

有限性でもある。従来欧米中心であった国際美術シーンにおいて、アジアから発信される現代美術はいまだマイノリティの地位を出ない。その中で、西洋のモダニズム観とは系譜の異なる現代美術の価値を積極的に提示していくためには、文化的・社会的背景に共通点のある作家、批評家などの声を集めて、それを緩やかな集合体として提示していくことが有効ではないだろうか。そのためには、他のアジア作家の聞き取りをしているアーカイヴと連携したり、私たちが収集したインタビューを適宜英訳したりしていくことが望ましいのだが、相当の予算が必要になるため、現時点では実現が難しくそうだ。



シンポジウムの討議風景 2009年11月14日

シンポジウムでも一つ興味深かったのは「権力」という要素だ。まず、報告者の加治屋健司氏が「権力の分散性」をオーラル・アート・ヒストリーの積極的な意義として提示した。これに対し、コメントーターや質問者からは、そうした意義は可能性として認めつつも、ナシヨナルな枠組みによ

る抑圧の危険性、有名作家への聞き取りの偏重、また書き起こしの編集・決定権などが、逆にアーカイヴの「権力」として指摘された。それぞれにもっともな指摘だが、公開して半年とたたないプロジェクトがすでにその「権力」を云々されることに少々驚くと同時に（ちなみに、総勢一五名のメンバー中、任期のない常勤職についている者は半数にも満たない）、「権力」に必然的に伴うはずの「責任」については誰も言及しなかったことが気がかった。畢竟、オーラルなものテキストに置き換えて資料化していくプロセスには、常に権力や抑圧が潜んでいる。だが助成金を資金源として、語り手との信頼関係に基づいて聞き取りを行う以上、アーカイヴにはその口述史料を守っていく責任がある。たしかに、音源をそのまま公開すれば、テキスト化に伴う抑圧は回避できるかもしれない。だが、アーカイヴが公共の利用空間を持たない現状では、ウェブ上での音源や映像の公開は逆に節度のない乱用を招きかねない。気の遠くなるような時間をかけてインタビューの書き起こしと校正を行い、語り手の了承を得て公開するという手続きは、私たちが組織として取るべき最低限の責任なのだ。オーラル・ヒストリーという取り組み、そしてアーカイヴという組織に構造的に内在する「権力」を引き受けた上で、どのように「責任」のある活動を展開していきけるか。この点に、私たちが真に利用者

（大阪大学グローバルCOE特任助教、日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ副代表